楳図かずおが描く女性像

女の多様性と美醜・正邪・変容～へびと楳図神学～

高橋明彦
金沢美術工芸大学教授／楳図かずお研究者

楳図作品の女性像を考える時、第一に気になるのはタマミに向かって放たれた青年・高也の次の一言である。

「きみは心まであくまだ。それじゃ、ばけものといわれても、しかたがないじゃないか！　そのみにくい手、みにくい顔は　きみの心のあらわれだ！」（『赤んぼ少女』）

ねじけた心持ちが顔の表情や造作にまで表れるということは、実際あり得ることだろう。そして、生まれたまま成長しないために南条タマミは父親から「ばけもの」と呼ばれており、美しく成長した葉子をいじめさいなむためにばあやから「タマミさまはあくまです」とも評されている。ともかくタマミは悪い子なのだから、そう言われても「しかたがない」かもしれない。しかし、高也の発言は正義の名のもとにタマミを突き放しその孤立を深めるばかりでタマミの救済にも事態の解決にもつながらないだろう。ただし私は今日的なポリティカル・コレクトネス※の観点からこの発言を問題にしたいわけではない。ここにはPCに収まらない、作品が発表された1967年当時においても、十分に疑問視されてしかるべき内容が含まれている。

▶「ばけもの」「悪魔」と呼ばれ、見た目も内面も醜いタマミ。しかし、死の間際に懺悔し、実は素直な健気さを有していた。

高也の発言を敷衍すると、顔の美しくない人は全て心まで醜いことになってしまわないだろうか。また顔の美しい人は必ず心も美しいのだろうか。これは我々の常識に、または人間への信頼に反する考え方だろう。そして、だとすれば、そんなふうにタマミを描く作者もまた差別主義者ではないのか。

美醜と内面をセットにする作家／楳図かずお

楳図かずおは美醜に強くこだわる作家だと指摘されることがままある。そうした指摘には、人間の価値は見た目で決まるといった論調が含まれているが、これに対して楳図研究者として私は、美醜を描く楳図のあり方は彼の作家としての一面に過ぎないと応じておきたい。楳図は決して人を見た目で判断するだけの浅薄な作家・人ではないのだ。先の高也の発言を読むとよく分かるが、楳図はつねに外見を内面とセットで語っている。そして、外見の美醜に対する内面の正邪は決して固定的ではなく、これらを様々に組み合わせて、女性を（時には男性も、つまりは人間を）多様に描いている。内面と外見との関係について、以下このことを構造的に概観していこう。

見た目は美しく内面が醜い女

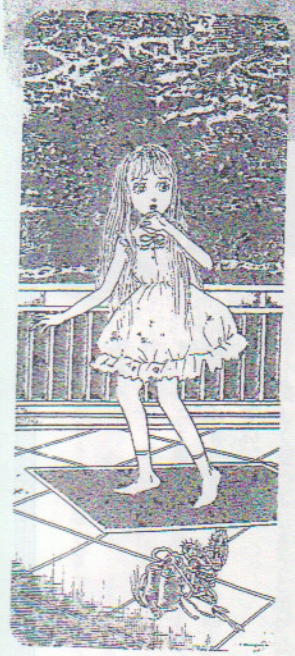
まず、楳図作品には見た目は美しいが、内面が醜く邪な女たちがいる。実際のところ楳図作品の女性の多くはこのタイプであり、そこには女はいくらきれいでも実はおぞましく汚いという思想がある。そしてこのことは楳図の作品世界を女性蔑視的に見せていなくもないだろう。

さて具体的にこのタイプの女性としては、『おろち』の「姉妹」と「血」とにそれぞれ描かれた姉妹（龍神家のエミとルミ、門前家の一草と理沙）が典型である。また『ティーンルック』誌連載の作品群は、同時期の『イアラ』短編群が多く成人女性を描いているのに対して、UMEZZ美少女ワールド全開といった趣きだ。その作品群のうち『かげ〈映像〉』『偶然を呼ぶ手紙』『蝶の墓』『灰色の待合室』は内面の邪悪さは未だ発現こそしていないが既にささいな嫉妬や羨望という形で美少女たちの心に潜んでいる。他方、『蛇娘と白髪魔』は『赤んぼ少女』に、『おそれ』は『おろち』「血」にそれぞれ隣接する設定の似た作品であり、そこではすでに少女たちの嫉妬が発現し始めている。このことは内面の正邪に振れ幅があることを示している。

ちなみに『神の左手悪魔の右手』第2話「消えた消しゴム」のみどり先生や『14歳』（後述）には「死んだら本性が見える」という思想や設定が見られる。これは女性や少女の内面の邪悪さを可視化したものと言えるだろう。ところで、内面の醜

『おろち』の「血」に登場する門前家の姉妹。純粋な少女もやがて内面に変化が…。

※ポリティカル・コレクトレス
性別、人種、民族、宗教などに基づいた差別や偏見を防ぐために政治的、社会的に公正　中立な表現を使うこと



純真無垢な
美少女・山本真鈴

さをあげつらうことは女性蔑視的でもあろうが、他方で女性解放的でもあることを補足しておこう。美人の心の醜さを描くことは「清く正しく美しく」という女に課せられた規範の拒絶であり、美人にとっても不美人にとっても時にカタルシスであるからだ。他人の欠点や失敗は、自分を気楽にし解放してくれるのだ。それは嘲笑や差別ではなく、むしろ共感を可能にするものである。

外見も内面も美しい女

次に進もう。外見も内面も美しい女たちがいる。それは規範的な少女像でもあるが、これもまた典型的なUMEZZ美少女ワールドである。『まことちゃん』の沢田美香や『神の左手悪魔の右手』の山の辺 泉のような、こまっしゃくれた意地悪そうにも見える美少女ではない。第一に挙げるべきは『わたしは真悟』の山本真鈴（110ページ）である。『洗礼』の上原さくらも本来は健康的な美少女だった。そして、こうした純真無垢な美少女に理不尽な悲劇が襲いかかることが、期待される楳図的ドラマ（ホラー）だと、まずは言えるだろう。さらに、古くは『へびおばさん』『狐つき少女』の山川家の姉妹（さつきとかんな）もまた、外見のかわいらしさと内面の素直さとが一致していた。

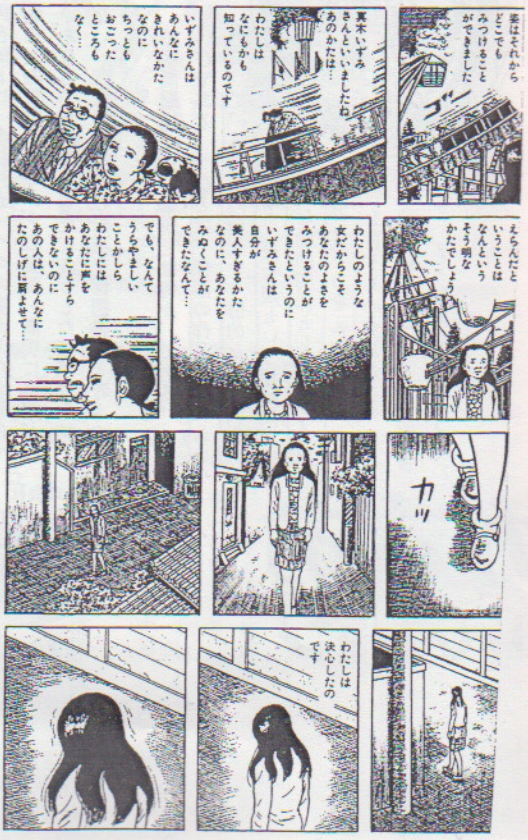
また、さらにさかのぼって貸本時代の初期作品（1950年代）でも純真可憐な少女たちがほとんどだと言って良い。母子ものの傑作たる『花びらの幻想』の浦島歌女や、自らを顧みず犠牲的な行動をとる『赤いハンカチ』や『丘の上の少女』の少女たちがそうである。貸本時代の後期（1960年代前半）にはひばり書房の「幻想ロマン」と銘打ったシリーズでも美少女たちが描かれる。特に『宿り花』の着生蘭（カヤラン）の美少女（153ページ）は、貸本時代前期の規範的な少女像から完全に脱却し、道徳を超えた女のりりしさが哀切とともに描かれていて、幻想性と現実性とが絶妙に交わるストーリー展開とも合わせて、同作は私には驚異の作品だと思う。

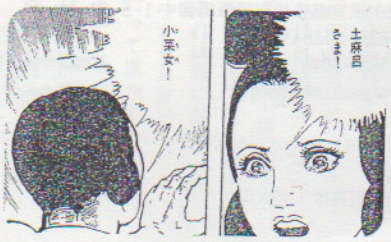
そしてさらに言うなら、こうした女のりりしさは、1970年の『イアラ』の小菜女（なめ）（100ページ）の一途さとして結実している。小菜女の内面の美しさ無垢さは、何か具体的な善行などに拠っているわけではなく、ただひたむきな一途さによるのである。同時期の『おろち』のおろちも、人物設定を明らかに示さないことによって道徳的な規範を超えた美少女たりえているだろう。少女のみならず成人女性にもこのタイプは存在している。『イアラ』短編群の中には、夫や恋人がいても不幸な関係にあったり不運に見舞われ生活に疲れたりしていながらも、それでもぎりぎり、りりしく生きる美しい女たちが描かれている。「きずな」「くさり」「洞」「宿」などの女たちである（ただし、彼女らをただ平凡な女が平凡な苦難を生きているだけだと評することも出来るだろう。世俗に生きる女たちである。そうであれば彼女らは次の例に相当する）。

では逆に、外見も内面も醜い例はどうか。高也が言うにはタマミがそれに当たるが、彼女とて死の間際に「タマミは悪い子でした」と懺悔する健気さを有していたことを忘れてはいけない。タマミの中の素直な健気さとふだん見せるねじけた性根とは、対立し矛盾する内面の表現ではあるが、その根っこは地続きだと考えるべきなのだ。あるいは、上原松子（『洗礼』）やローズ氏とそのクローンたるのばら（『14歳』、ただしローズ氏は男であろうが）なども、見た目はグロテスクで性格も悪逆非道な異常者たちだが、ただし元々は美しい外見を有していた。あるいは、妖怪百人会を組織する孤童門（こどもん）（ねこ目小僧）も、タマミと共通性を持つ点（生まれたまま成長せず姉妹に嫉妬していた）で、全くの邪悪なだけの存在だとまでは言えないだろう。こうした意味では〝楳図作品には外見も内面も醜い人物というのはほとんど登場していない〟とも言えるだろう。ただし、醜いとまでは言えなくとも、平凡な見た目と心しか持たない女性たちは、「きずな」などの『イアラ』短編群の女たちにいたとも言いえることは先にも見た通りである。だとすれば、外見も内面も醜い、あるいは平凡だという例は、案外多いということになる。

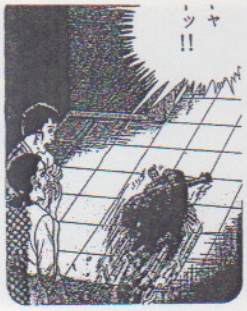
見た目は美しくないが内面は美しい女

最後は、見た目は美しくないが、心が美しいとされる女たちである。『イアラ』では小菜女たち（彼女の生まれ変わりかと思われた女たち）は一様にみな美しいが、ただ一人「わび」のゆきだけは平凡な顔立ちをしている。しかし、千利休は彼女を美しいと看破していて、他の美しい小菜女（かと思われた女たち）と同列に並べて物語は展開していった。楳図作品のスターシステムとして、ゆきは『洗礼』の良子も演じることになるキャラクターだが、良子も同じように、見た目の地味さとは別に内面の





小菜女の美しさは、ひたむきな一途さによる内面の美しさ。



シンゴの起こした奇跡によって、
内面通りに美しい姿になった美紀。

たかはしあきひこ　1964年2月、新潟県生まれ。東京都立大学大学院博士課程退学。金沢美術工芸大学教授。専攻は日本近世文学・出版史、楳図かずお研究。著書に『楳図かずお論 マンガ表現と想像力の恐怖』（青弓社）。共著に『ホラー・ジャパネスクの現在』（青弓社）、『近世奇談集成1』（国書刊行会）など。個人サイトに「半魚文庫」。

美しさや聡明さが保証された存在である。

短編「谷間のユリ」（1967年作品）には、ゆきや良子よりはさらに進んで不美人の女性（名前はない）が登場する。彼女は〝自分が不美人であるがゆえにかえって男性の本当の良さを見抜ける女である〟と内心で自負している。向かいのビルで働く〝見た目はまるでさえないが優しく誠実な男性〟に密かに心を寄せている。と同時に、彼の誠実さを見抜ける聡明な女性が現われることを恐れてもいる。はたして、真木いずみという美人がその男の恋人になる。この時この不美人はどのような行動をとるか。「谷間のユリ」は、幽霊奇譚を装ったリアルな心理サスペンスという見事としか言いようのない完璧なストーリー的構造を備えているが、同時に、美醜とそれを超える精神の倫理を描いた絶品である。

内面の美しさ正しさ
神聖なる存在の美紀

さて、しかし楳図作品において、見た目に反して内面が美しいとされる存在は、なんと言っても松浦美紀（111ページ）である。『わたしは真悟』に登場するダンスの中の子である。美紀ちゃんはさとるの一家が引っ越した後の団地の部屋に入居した夫婦の子だ。隣室のしずかの目撃によれば「ぐにゃぐにゃしたわけのわからないもの」であり、電話回線を介してシンゴと会話し、シンゴを人間だと認めるのである。美紀ちゃんの心の美しさとは、これを端的に言うならば、まさに人間らしさであり、それは人間らしくない姿こそが証明するものなのだ。「谷間のユリ」では一旦否定された、外面の醜さこそが内面の正しさ美しさを見抜くという思想が、ここでは極めて美しい奇跡として肯定されているのである。

美紀ちゃんは、シンゴと会話し、互いに人間であると承認しあった結果、奇跡を発現するシンゴによって、実にかわいらしい姿（裸の肉体）が与えられる。この裸は「しっぽのある少女」（『ガモラ』の猿飛博士の妻になる少女）と並ぶ、人間ではないが美しい姿として、あるいは理想の妻として描かれる女性像である。さらに言えば、美紀ちゃんは洋服を着て外に出て、シンゴを助ける際に路上で血反吐をはくが、それは初めての急激な運動による体調不良のせいではなく、シンゴと同じように、自身の身体を犠牲にして奇跡を起こしているのである。

こうした神聖なる存在とさえ言える美紀ちゃんに関連して、もう一人これと近い人物をあげておこう。『14歳』できよらを私生児として産むヨッコ（戸川洋子）もまた、見た目はさほどの美少女ではないが、心が美しい少女である。ヨッコの聖性は、彼女はそもそもキリストを産む聖母のイメージを付与されている点で必然的なものである。きよらを抱いて地下道を逃げ惑う際に目鼻や口から血を吐くのは美紀ちゃんの血反吐と同工である。そしてまたヨッコは地球の滅亡とともに死を余儀なくされるが、描かれた死顔には変化はない。つまり「死んだら本性が見える」という設定において、邪悪な姿に変容することはない、心の美しい少女なのだ。

以上ここまでで美醜と正邪とをめぐって多様に展開、表現された女性像を見てきたが、外見と内面の関係は固定されておらず、美と醜、正と邪のそれぞれもまた変容しつつあることを指摘した。

超越性を持たない
内在的な本質表現＝楳図神学

さて、私は、こうした楳図の女性像の多様性を生み出す、外見と内面の対比として展開される美醜、正邪、聖俗といった二元的対立は、一つの本質・実体から発現したものだと考えている。そもそも多様な無限の展開を認めつつもその根源に一つの本質を置くあり方を哲学ではプラトニズムと呼んでいる。ただし、標準的なプラトニズムが結局のところ本質を優先して世界の多様性を仮象としてしか見ない立場であるのに対して、改良型のプラトニズムは多様性をこそ重視する。それは例えばプロティノスであり（流出説）、※スピノザであり（神即自然の汎神論）、※ベルクソンであり（エラン・ヴィタールによる生物多様性）、※ドゥルーズである（問題としてのイデアと解としての生）。東洋思想で言えば朱子学である（理一分殊）。この時、神的な本質と表現された多様性とは内在的な関係を有している。内在的とは、多様性が一つの本質からの合理的で地続きの表現であり、その展開・表現に飛躍がないあり方である。そして、こうした超越性を持たない、内在的な本質の表現を楳図神学と呼ぶのである。

では問題は、その本質とは何か、である。

へびである。へびとは、楳図の作品世界において、外見と内面という静的な対立関係のみならず、母や娘という相対的・循環的な動的関係として発現する、変容せざるをえない生命の本質を言うものである。今はまだ論証抜きだが（つまり飛躍があるが）、そう指摘しておこう。「マ

楳図の作品世界においてのへびとは？

※スピノザ、ベルクソン、ドゥルーズ
いずれもヨーロッパの哲学者の名前。

かずお
コレクション

発行所　株式会社 玄光社
〒102-8716 東京都千代田区飯田橋4-1-5
TEL：03-3263-3515（営業部）
FAX：03-3263-3045
http://www.genkosha.co.jp

編集協力　湯浅裕行（スパイスコミニケーションズ）

監修協力　高橋明彦（金沢美術工芸大学）

執筆協力　福澤賢一／木村 文／出雲弘紀／
谷藤 太（以上 Wrestling Creator Group）
篁光太郎

楳図インタビュー最終頁。

キレイな人を描くのは難しい

——髪型の話が出たんですが、今回この本でインタビューした方たち、皆さんが真鈴が大好きで、目の上の前髪が少し長いことに気づいてました。

楳図：そこは〝今までとちょっと変えなきゃ〟と思って、描いたところですね。それまでは、顔を目立たせるために髪の毛はなるべく目鼻を避ける長さで描いたんですけど、「いや、これからはちょっと違うぞ」と思って、あえて眉の上まで髪の毛を持ってきましたね。正解だったと思います。

——そう考えると、デビュー当初から女の子の描き方がずいぶん変化しましたね。

楳図：時代や雑誌に合わせて改良に改良を重ねて。読者のことも考えてですよ。もう、振り回されてました。周りの傾向に（笑）。

——ちなみに楳図さんの中で一番好きな女の子のキャラクターって誰になりますか？

楳図：個人的には、のばら（103ページ）とか好きです。エグすぎて。一般的には嫌われると思いますけど。あとは、やっぱりおろちがいいかな。

——おろちのどんなところでしょう？

楳図：他の女の子は普通路線を踏まえてるけど、おろちは普通路線じゃない。特に目が違う。

——目ですか？

楳図：目が釣り上がり気味。他の女の子はだいたい平行というか。でも、たれ目はあまり描いてません。たれ目の美人を描くとアンニュイな竹久夢二風になっちゃう。

そう言えば、参考にはしてないけど、当時、評判だったのはオードリー・ヘップバーンですね。あの人は衝撃的で、僕は「あ、この人はマンガだ」と思いました。マンガを現実にした美女。すごいキレイで素晴らしい。もしかしたらオードリー・ヘップバーンの雰囲気は、美人の要素として僕の絵のどっかに入ってるかもしれないですけどね。

——美しい女性の基準と考えれば、どうしても近くなりますよね。他に当時の美女と言えば？

楳図：あと、大人の女性でキレイといったら原 節子さんや新珠三千代さん。キレイな人を描くのはけっこう難しいんですね。なぜかと言うと、キレイを追求していくと皆似てしまって、同じ方向に行っちゃうんです。だから個性がなくなっちゃって、描き分けが難しいんですね。

——美しく整ってしまうと顔が似ちゃうんですね。

楳図：さらにキレイで個性的となると、もっと難しいと思うんですね。個性っていうのは、多少どこかキレイの基準から外れることで、そうすると、それはキレイではなくなっちゃう。

——矛盾してますね。

楳図：それはマンガの中においても同じで、それをカバーするのは髪型。そこで変化をつけるしかないですよね。

シンプルに新しいものを描くこと

——楳図さんのマンガを描く姿勢と言うか、ポリシーについてお聞きしますが、楳図さんにはすごく反骨精神があって、誰もやってないことをやってやろうっていう感じがすごくします。

楳図：もうそれだけです。そこが一番のモットーというか。怖いのが描きたいというのもありますけど、単に怖いというんじゃなくて、他がやってなくて、自分もやってなくて、全く新しいもの。新しいこと、これがないと描いてる意味というか、描き甲斐がない。でも、それはすごく大事なことであって、考えようによっては単純なことでもあるんです。新しいものを描くことだけを思っていればいいので。

あれこれいろんなことを考えて、人と違うことをやろうと比較するのって余計な努力じゃないですか。それより、単純に新しいものを描こうと。それ一発ですよ。余計な混乱も全くないです。すごいシンプルです。僕にとってはそれだけを思って、あとは怖い話を描くだけのことなんですね。

——常に新しいことを、ですね。あと思うのが、作品を通じて僕らの既成概念を崩そうというか、「当たり前と思っていることは当たり前じゃないよ」っておっしゃってる感じがします。

楳図：だから、既成概念っていうのは新しくないわけですよ。前にありましたっていうのが、僕の中ではいけないことで、単純に「新しいこと」を描いただけなんです。

——なるほど。

楳図：それから、僕は「美とは正義だ」って思います。言い切るのは、ちょっと難しいかもしれないけど。〝美〟、美しいっていうのは、そこに正しく組み上げられた理由とかバランスがあるからキレイなんですね。それは美＝正義と言っていいと思うんです。『洗礼』は正義のないものは美しくないと、それを逆にして言っているわけです。

例えば正義の名のもとに悪いことをしたら、もはやそれは正義じゃないし、美しくない。正義はどこかで美しくないといけない。言ってることの理屈が通ってても、それが美しいと思えなかったら、どっかで間違ってるに違いない。言ってることが美しいかどうかで見極める。ちゃんと理由が分かればいいけど、そうでない時は、それが美しいかどうかで判断してもいいんじゃないかと。それが全部とは言わないですけどね。

——美は正義で構成されていなければ、美ではない。正義のない美は、本当の美じゃない。

新珠三千代のような美人が登場。『悪魔の数式』より

楳図：そういう風に言い切ると、そうあらねばと思うことがたくさんあると思いますよね。キレイにやってるようでも、ごまかしがあったりすると、美しくないなと思ったりするじゃないですか。

——自分が美しいと思うものに、正義があるかは一つの基準ですよね。でも難しいですよね、美とは何か、正義は何かって、価値観が分かれますから。

楳図：だから正義は相手がいてこそ決まるもので相手が悪ければ、片方が正義になるわけだし、多数決で勝てば、それが正義。理屈が正しくても、大勢から外れているとそれは悪になる。難しいけど何もない中から見分けるとしたら、「美は正義」って思って見分けるのかなと思います。

——個人の美意識が高いかどうか、そこも正義の高さも定められるような気もしますね。

最後に本書で、これまで描かれてきた少女たちを見ていただいたんですが、いかがでしょうか？

楳図：あっちやこっち、いろいろ見ながら試行錯誤はありましたが、それでもまあ僕の世界ということで、この娘たちを愛していただければ嬉しい限りです。

楳図
美少女
編集人 勝山俊光
編集担当 切明浩志
発行人 北原 浩
発行日 2019年